

学習をさらに 洗練するための本

藤原正彦『祖国とは国語』（新潮文庫 新潮社）

ベストセラーとなった『国家の品格』の著者のエッセイ集。書名にある「国語」の大切さだけではなく、教育や科学、そして社会そのもののあり方を見つめ直すカギが短い文章の中に埋め込まれています。さらに著者の家庭生活や生い立ちにふれた話に、人間としての生き方、家族や社会との向き合い方が示唆されています。

出久根達郎編『漱石人生論集』（講談社文芸文庫 講談社）

漱石に人生論集という著書はありません。この本は漱石の最高の読み手である出久根達郎が編集したものです。人が筋を通して生きることは結局は他人に最大の敬意を払うことになることと教えてくれます。

『古今和歌集』（新日本古典文学大系 岩波書店、ほか）

「古典」や「韻文」も読んでみましょう。「韻文」は詩の言葉による表現です。日本の韻文の古典である『古今和歌集』は、面白く読めるようになるまで努力が必要なのですが、そこを越えると一生楽しむことができます。自分がいかに「古今和歌集的」であるかという意外な事実もわかってくるでしょう。

我妻 栄『法律における理窟と人情』第2版（日本評論社）

法学の勉強は、理窟と人情とのバランス感覚を学ぶことに尽きます。著者我妻栄は、昭和年代に「民法と言えば我妻、我妻と言えば民法」とまで讃えられた民法学者です。わかりやすく、おもしろく、かつ、生涯こころに残る本です。ぜひ一読してみてください。

サミュエル・スマイルズ 竹内均訳『自助論』（三笠書房）

「天は自ら助くる者を助く」自分で自分を助けられない人を一体誰が助けてくれようか。自分で自分を信じられない人を一体誰が信じてくれるだろうか。全ての基本は、自分の足で立つこと、「自立」にあります。明治の先達にも愛された名著の現代語訳版。困難に立ち向かい、人生を切り拓く勇気を新たにしてくれるはずですよ。

ジョセフ・E・スティグリッツ 楡井浩一訳『世界に格差をバラ撒いたグローバリズムを正す』（徳間書店）

「グローバリゼーション」の下で「構造改革」なくして日本の明日はないといわれました。本書からグローバリゼーションの下でもっとも正しいといわれた政策が日本だけでなく世界各国に対してどのような結果をもたらしたかを学ぶことができます。

フィリップ・J・デーヴィス、ルーベン・ヘルシュ 棕田直子訳『デカルトの夢』（アスキー）

17世紀フランスの哲学者であり数学者でもある、ルネ・デカルトはあらゆる知的活動が論理的演算によって処理できる世界を夢見た。コンピュータの出現によって世界は大きく変えられたが、私たちの生活の向上に役立っているのだろうか。コンピュータ哲学への大きな第一歩を踏み出してみませんか。

川北義則『人生・愉しみの見つけ方』（PHP文庫 PHP研究所）

辛いことやイヤなことがあったとき、プラス発想のクセを学生時代に身につけることができれば、人生は楽しく、充実したものになります。この本は、昨今の変化の著しい時代を愉しむ生き方について、100の逆転発想からヒントを与えてくれます。

小川鼎三『医学の歴史』（中公新書 中央公論新社）

医学や医療をこれから学ぶ上で、その歴史的意義を知ることは大切です。古代の医療がどのようにして現代我々が学ぶ医療に発展したか、ヨーロッパだけでなく、中国や日本における医学の歴史を分りやすく示した好著です。

松下幸之助『道をひらく』（PHP研究所）

松下電器の創業者である松下幸之助が、自分の体験と深い洞察をもとに「人の生きる道」について含蓄のある言葉で綴った短編随想集であり、平易な文章で読みやすく書かれています。この本は、これからの大学生活で困難に遭遇したときに、勇気を与えてくれたり、問題解決のための考え方や方途を示してくれると思います。

中田宏『なせば成る 一偏差値38からの挑戦—』（講談社+α文庫 講談社）

この本では、人生をより良く生きるための「考え方」が、著者の赤裸々な体験を通して語られています。人間の能力とは何か、勇気や忍耐の大切さなど、多くのことを教えてくれます。まさに、己の道を切り開いています。是非とも一読を。

